

研修会報告

平成 25 年 11 月 18 日

文責：学術部長 氏家和明

研修会テーマ「がん化学療法について」

開催日時 平成 25 年 11 月 16 日（土）16：00～18：00

会場 TKP 仙台西口ビジネスセンター カンファレンスセンター2A

参加者 会員参加者 18 名 賛助会員 7 名 実務委員 4 名 計 29 名

内容

16：00～16：25

メーカーレクチャー「がん治療におけるコンパニオン診断薬」

アボットジャパン株式会社モレキュラー事業開発部 平岡 学

がん細胞に特徴的な分子を標的にした治療薬が分子標的薬で、その投与判断を目的とした対外診断用医薬品はコンパニオン診断薬と表現されている。乳癌におけるトラスツマブ投与のための HER2 検査、非小細胞肺癌に対するクリゾチニブ投与のための ALK 検査としてアボット社が開発した FISH 法のキットの紹介がなされた。

16：30～18：00

講演 「がん化学療法と臨床検査」

石巻赤十字病院腫瘍内科部長 大堀 久詔 先生

これからは個別化医療の時代である。個別化医療とは、遺伝的背景、生理的状态、疾患の状態等、個々に最適な治療法を設定する。それには適切な薬剤選択と副作用軽減が必要。薬剤開発にはゲノム薬理学の発展があり、分子標的治療薬がその代表的なものである。分子標的薬とはどういうものか、わかりやすい説明を受けた後、HER2 陽性胃癌、肺癌、大腸癌、腫瘍マーカーについて講義があった。

HER2 陽性胃癌に対しては、HER2 阻害剤としてのトラスツマブを使用。そのために、IHC（免疫染色）での鑑別が必要。適正な結果を出すためには、ホルマリン固定時間に注意すべきである。肺癌に関してはEGFR 遺伝子変異と、EML4-ALK 融合遺伝子が原因によるものがあり、それぞれ詳しく説明があった。EGFR 過剰発現の大腸癌、kras 変異について、CPT-11 の代謝とその使用時副作用を左右する、UGT1A1 遺伝子多型について講義があった。

医療従事者としてがん化学療法の最新の知見を知る機会を得たことは非常に良かった。がん化学療法はチーム医療であり、いつか臨床検査技師もその一員として活躍できるよう勉強していくべきだと感じた。